

大学における実習教育の意義と役割

農学部長
富永茂人

講義概要

教育基本法第7条第1項によると、大学は、「学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」ことを基本的な役割としている。すなわち、大学は、幅広い職業人や高度専門職業人を養成し、社会に輩出するための「教育」と「研究」に加え、教育研究成果を社会へ還元する「社会貢献」という3つの大きな役割を担っている。今日の社会情勢の急速な変化に伴って、さらに大学にはそれらの役割に対して質の向上や保証が求められている。ここでは、「鹿児島大学憲章」および「鹿児島大学の基本目標」について述べるとともに「大学附属施設における実習教育の意義と役割」について考えていきたい。

「大学における実習教育の意義と役割」

富永深人(農学部長)
平成25年2月7日
教育学部管理棟・理系研究棟1F中会議室

大学の役割・使命と人材育成

- ・ 大学は、「学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」(教育基本法第7条第1項)ことを基本的な役割としている。

幅広い職業人や高度専門職業人を養成し、社会に輩出する役割を担っている(教育・研究)

+ 社会貢献

大学の3つの使命
・「教育」(知の伝承、人材育成)
・「研究」(知の創造)
・「社会貢献」(教育研究成果の社会への還元)



今日の社会情勢の急速な変化に伴って、大学にはそれらの役割に対してさらなる質の向上や保証が求められている。

大学に対する高度職業人育成の期待

- ・ 専門教育(専門分野)と職業との関係を主体的に捉えた「職業教育」への期待は大きい。
- ・ 職業教育は、一定の職業に就くために必要な知識、技能、態度等を培う教育であり、専門的な知識、技能の単なる修得ではない。

大学設置基準 第42条の2

(社会的及び職業的自立を促すために必要な能力を培うための体制)
・ 大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を促すために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生指導を通して培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。

大学の理念や建学の精神、特色などに応じて、機能別に緩やかに分化しつつある

(平成17年中教審答申)

大学の機能分化

7つの分類

- 世界的研究・教育拠点
 - 高度専門職業人養成
 - 幅広い職業人養成
 - 総合的教養教育
 - 特定の専門的分野(芸術、体育等)の教育・研究
 - 地域の生涯学習機会の拠点
 - 社会貢献(地域貢献、産学官連携、国際交流等)
- (平成17年中教審答申)

鹿児島大学は赤○を選択 ← 職業教育、実習教育、技術教育が極めて重要！！

大学憲章、基本目標にも示してある！

鹿児島大学憲章

鹿児島大学は、日本列島の南に位置し、アジアの諸地域に開かれ、海と火山と島々からなる豊かな自然環境に恵まれ地に在る。この地は、我が国の変革と近代化を推進する過程で、多くの困難に果敢に挑戦する人材を育成してきた。このような地理的特性と教育的伝統を高め、鹿児島大学は、学問の自由と多様性を堅持しつつ、自主自律と進取の精神を尊重し、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす。

○ 教育：鹿児島大学は、学生の潜在能力の発見と適性の開花に努め、幅広い教養教育と高度な専門教育を行うとともに、地域の特性を活かした進取の気風を養う。

鹿児島大学は、真理を愛し、高い倫理性と社会性を備え、向上心を持って自ら困難に立ち向かい、国際社会で活躍しうる人材を育成する。

○ 研究：鹿児島大学は、個々の研究を重視するとともに、種々の学問分野における優れた研究者の連携により、21世紀を先導する研究者を育成する。

鹿児島大学は、地域の要請に応える研究を展開するとともに、普遍性を求める研究活動を推進し、世界水準の研究拠点をめざす。

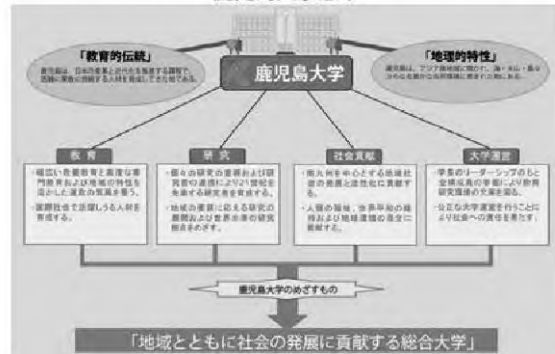
○ 社会貢献：鹿児島大学は、南九州を中心とする地域の産業の振興、医療と福祉の充実、環境の保全、教育・文化の向上など、地域社会の発展と活性化に貢献する。

鹿児島大学は、アジアや太平洋諸国との連携を深め、研究者や学生の双方間交流および国際共同研究・教育を推進し、人類の福祉、世界平和の維持、地球環境の保全に貢献する。

○ 大学運営：省略

鹿児島大学が目指すもの

鹿児島大学憲章



鹿児島大学の基本目標

鹿児島大学は、「鹿児島大学憲章」に基づき、我が国の変革と近代化の過程で活躍した先人の意志を受け継ぎ、自ら困難な課題に果敢に挑戦する「進取の精神」を有する人材を育成し、地域とともに社会の発展に貢献する知の拠点として、「進取の気風にあふれる総合大学」をめざす。その実現のため、以下の基本目標を掲げる。

- ・ 「進取の精神」を有する学士の育成
- 鹿児島大学は、幅広い教養の厚みに裏打ちされた倫理観と生涯学習力を備え、「進取の精神」を有する人材を育成するため、学士課程の基盤となる共通教育の改善を図るとともに、専門教育の質を確保するシステムを確立する。
- ・ 大学の特色を活かした研究活動
- 鹿児島大学は、独自の・先端的な研究を積極的に推進するとともに、総合大学の特色を活かし、島嶼、環境、食と健康等の全人類の課題の解決に果敢に挑戦する。
- ・ 地域社会の活性化に貢献
- 鹿児島大学は、知的・文化的な生涯学習の拠点として、地域との連携を重視するとともに、各学部等の特色を活かした社会貢献を推進し、地域社会の活性化に貢献する。
- ・ 国際的に活躍できる人材の育成
- 鹿児島大学は、アジア・太平洋諸地域との学術交流・教育交流を通して、国際交流拠点としての機能を高め、国際的課題の解決に貢献し、グローバル化時代に活躍できる人材を育成する。
- ・ 社会に関わった大学
- 鹿児島大学は、地域に関わったキャンパス環境を整備するとともに、社会への積極的な情報提供に努め、透明性の高い公正な大学運営と改革を図ることにより、社会への責任を果たす。

農学憲章(全国農学系学部長会議)

農学の使命：学術活動を通じて人類の生存と活動に基盤を与え、もって社会に貢献すること。

1. 農学の意義

(農学の理念)：地球という生態系の中で、環境を保全し、食料や生物資材の生産を基盤とする包括的な科学技術および文化を発展させ、人類の生存と福祉に貢献すること。

(農学の定義)：人間の生活にとって不可欠な農林水産業ならびに自然・人工生態系における生物生産と人間社会との関わりを基盤とする総合科学であり、生命科学、生物資源科学、環境科学、生活科学、社会科学等を重要な構成要素とする学問である。

(農学の特質)：農林水産生態系の持続的保全と発展を図りながら、人類と多様な生物種を含む自然との共生を目指す総合科学であり、他の学問分野とは異なる独自の存在基盤を有する。

(農学の役割)：環境調和型生物生産、生物機能の開発・利用および自然生態系の保全・修復に関する科学の促進と技術開発を行うとともに、生命科学としての学問分野と連携した研究を推進することにより、人間性を育む科学としての社会的役割を担うものである。

II 農学の教育

(教育の目標)：地球規模で農林水産業・農学を考えることができる人材の育成を目標に、個性と学習意欲を伸ばし、広い視野、高度な専門的知識と技術、理解力、洞察力、実践力を獲得できる創造的で機動性に富んだ教育を追求する。

(教育のシステム)：総合科学としての農学のもつ幅広い知識、課題探求能力、問題解決能力を修得させるため、多様な教育プログラムからなる柔軟な教育システムに立脚したものとす。

(教育の点検・評価)：その実施に当たって、学生の学習活動、教員の教育活動、教育環境、教育システムおよび教育の支援体制等について自己点検を行い、また学生ならびに適切な第三者の評価を受け、その結果を教育理念の達成に反映させる。

IV 農学の社会貢献

(社会貢献の目標)：農学の社会貢献の目標は、地域、社会、民族、人種、国籍等のあらゆる境界を超えた人類共通の真理を追求し、全人類の生存と福祉に貢献できるよう、不偏・平等の原則に立つこととする。

(地域社会への貢献)：農学は、地域の農林水産業の振興を図るとともに、自然環境の保全・修復に関する教育研究を通じて、地域社会に貢献する。(国際社会への貢献)：農学は、グローバル化した食料や環境問題解決のため、世界各国の学生および教育・研究者と交流を深め、相互理解に基づく国際的視野に立った教育研究を推進することにより、国際社会に貢献する。

「農学」発展のための研究・教育の整備

- (1) 高度な水準の研究・教育環境の用意
- (2) 益々増大する人材需要への対応

- (3) フィールド科学(実習教育)の必要性と条件整備

19世紀以来の理論科学、実験科学の強化に加え、これらの科学方法論では押しきれないフィールド科学の確立の必要性がますます高まっている。すなわち、地球規模での食糧問題と環境問題の克服のためには、陸地、水圏、気圏の相互関連・物質循環を解明する必要がある。また、野外あるいは現地での実習・実験を通じた教育・研究によってはじめて豊かな人間性を持った人材を育てることが可能ともなり、フィールドでの農学の研究・教育の一層の充実が重要性を増している。農学系学部では附属農場、附属演習林、附属練習船・調査船、附属水産実験所などが設置され、これらの施設を活用した活発な研究を促してきた。今後はこれらの既存の教育研究施設の拡充・整備に加えて、新たな施設・設備の拡充により、フィールド科学としての農学の発展のための条件整備が強く求められている。

- (4) 大型プロジェクトと共同研究
- (5) 農学の研究・教育における国際協力・国際貢献

附属農場、附属演習林などの実習施設における技術教育の使命・理念・目的

大学の附属農場、附属演習林の使命

目覚ましい発展を遂げつつある生命科学、情報科学、環境科学など農学関連科学を取り入れた新たな内容の多方面の実習教育に脱皮・展開してきている。これは、農村や農業の急激な構造変化からすれば、極めて当然なものであり、ニューバイオテクノロジーの応用による新技術の開発は農業関係者から強い関心が寄せられている。あるいは野菜工場に代表される「土離れ農業」や生物農薬などの技術開発も、現実に進められている。また、人類のあるいは地球の課題となっている環境や食料問題は、環境保全型農業技術の開発を伴って世界的規模で進められている。

以上のことから、今日の実習教育は農業のニースのみならず、時代の推移とともに変遷していくニースにも視野を向け、それに対応しなければならぬ段階にきている。そのような時代における実習教育では、最新の農林業技術はもとより、グローバルな問題である食の安全や環境問題等にも対応した先進的・先導的なフィールド農学を身に付けた人材を育成することが重要な使命となっている。

III 農学の研究

(研究の目標)：農学の理念に基づいて、人類の生存と福祉に貢献することを目標とする。

(研究の進捗)：基礎科学に立脚した応用科学の促進により、継承・伝承すべき基礎的研究、近未来を拓く先端的研究、遠未来的な独創的研究を共に尊重する。

(研究の連携)：大学の個性と地域性を尊重しつつ、国、地方自治体および民間企業等の研究機関、生産者団体、消費者組織等と連携し、各組織間において協調性と柔軟性を保ちながら推進する。

(研究の点検・評価)：研究の方法や成果について常に自己点検を行い、また適切な第三者の評価を受け、その結果を研究目標の達成に反映させるとともに、成果を適正に社会に還元する。

農林業は次世代に継承すべき産業

農林業への期待

- ・自給率の低下、農業後継者の不足、大規模な耕作放棄地(3.8万ha)
- ・林業でも人手不足が常在化、国土は荒廃し、里山での鳥獣害
- ・流れゆく国土・地域資源を保全するために、農業生産活動に大きな期待

近年

- ・安全・安心な食品に対する国民的関心の著しい高まり
- ・地産地消・スローフードへの取り組み
- ・生産者・加工・流通・消費者との新たな連携
- ・国による食品安全行政の推進+消費者の視点に立った施策の強化
- ・耕種農業と畜産との連携強化
- ・環境保全型農業の構築に向けたさまざまな施策

農林業は次世代に継承すべき産業

- ・土地や大量の水、太陽エネルギーを原料とした自然循環的な生産様式が基本
- ・実学の場合として、これまで蓄積してきた大学付属施設の成果や理念をさらに広め、専門領域を超えて、体験学習、生涯教育、医療領域、社会科学などとの交流
- ・地域固有の伝統や文化の継承され、農業・農村に生活する人々の復興
- ・国民・消費者の生活を豊かにし、健全な国土・国民の醸成に寄与できる

農林学の基本的役割と附属施設の役割

農林学の研究対象：基本的に農林業

農林業の基本的役割

- ・人類の衣食住に係わる生物素材を供給する産業
- ・生物生産のための生物資源の開発と安定的供給を行なう産業
- ・世紀の農業の役割は増加し続ける人口を養うための食糧を確保するということが主であり、農林業の科学的基礎である農林学は、自然科学の進歩による技術革新を生物生産の収量を上げることにウエートを置いて来た。

附属施設の役割

- ・人類の衣食住を生産するための基礎的自然科学である農林学理論の実践の場
- ・生物生産技術革新のための基礎実験の場
- ・生物生産業としての農業を支える農業人(農業経営者、農業技術者等)の育成の場

附属施設は人類の衣食住の生産に係わる学問を行う農学部には必要不可欠で、農学部と附属施設農場は生物生産を担う両輪である。

附属農場、附属演習林などの実習施設における技術教育の使命・理念・目的

大学の附属農場、附属演習林の理念

21世紀の農林業と農学の主眼は環境と調和した生物生産に重点が置かれなければならない。それなしには農林業の本来の目的である持続的な生物生産も有り得ない。また、農林業の持つ環境保全機能を積極的に活用することも重要である。今後は、衣食住のみでなく、健康で文化的な環境、アメニティが重要であり、これらを達成するためには農学の持つ総合科学的側面の発揮が重要である。農学の理念は、地球という関係系の中で、持続的な生物生産を行う包括的な技術を開発させ、人類の幸福に寄与することである。従って、大学農学部や附属施設も、食糧生産を中心に置きながら、食育なども含め多様な社会的役割を担うように、自らを変革して行くべきである。

大学・附属施設の教育目標

教育の成果に関する目標
(人材育成目標)

農林業生産関連分野の技術者や地域指導者など、
新たな時代の社会作りに貢献する人材の養成を実習
を通じて行う。
創造性に優れ、社会のニーズに対応できる人材の
養成を実習を通じて行う。
分析力、総合力、企画力及び実行力を備えた人材の
養成を実習を通じて行う。
しっかりした職業観を有する人材の養成を実習・演習
を通じて行う。

講義と実習・実験

農林学教育における実験・実習は、生命、生態系、自然環境、生
物生産、農業社会等を総合的に感じ取り、それらの有機的関係、
多様性、複雑さ等を理解するために重要な役割を演じる。これ
らの総合的体験と理解を講義・演習科目と連携させること
によって、農林学教育に深さと広がりが出ることに留意することが
望まれる。

実験・実習科目は、その内容が関連している講義科目や演習科
目に併設されるのが最も効果的である。実習科目においては、
関連の講義科目の前後に配置するか併設して、当該事項に対し
て学生の興味を得るようにし、あるいは講義内容の体験的理解
を促進させるのに役立たせる等の工夫を要する。

附属農場・演習林における実習教育の現状

農林学分野の極端な高度化、細分化
・本来最も重要視されるべき総合性の欠如が顕在化
・特に若い教員や研究者は生産現場を知らない農学者となり
・理学、工学、医学などとの研究教育の役割分担が不鮮明化
・生産現場の実習教育の単位数の現象(複数の大学)
・学生は講義や実習からも生産現場の技術の理解や習得の機会
が減少
・したがって、農学的思考を持つ学生、研究者が著しく減少

この問題を解決するためにフィールドにおける研究、教
育の場としての附属農場・附属演習林の役割は今後ま
ずますます重要なものとなる。

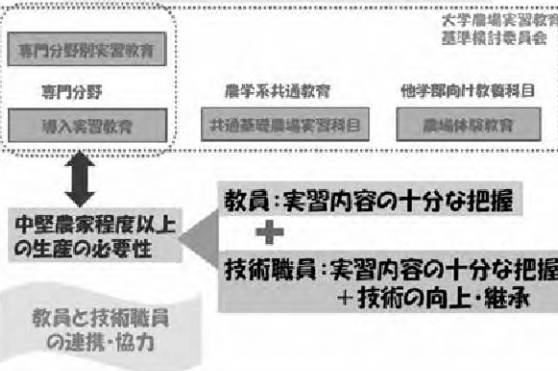
附属農場・演習林における 実習教育の質保証

今日の社会情勢の急速な変化に伴って、ユニバーサルか
つグローバルな人材を期待し、大学にはそのための質の
向上や保証が求められている。

大学における教育・研究は、専門化・細分化が進み、
附属施設のフィールドにおける食・生命・環境などに關
する総合的な学びの重要性は増している。

フィールド教育の質保証 ↔ 各大学における実習
の特徴や多様性を維持しながら

実習教育における質保証



実習教育の質保証のための方法

教育の到達目標(カリキュラムポリシー)

実習教育を構成する各細分野(育苗、植え付けなど)に
ついて、潜在的な課題も取り上げながら、実習を通して総
合的、体験的、実践的に理解するとともに、農業や地域に
おける農林業の役割やこれからの持続的生産のあり方、
食糧自給と農家経営の関係などについての思考を深める。

・実習は単なる技術の伝達ではない。
・技術には、常に経営的な考えが組み込まれている必要
(技術のコストパフォーマンス)

平成24年全国大学附属農場協議会

農学部における教育・研究と実習施設

農林業は、時代と共に変遷しながら発展してきたが、その基本的役割は、終始広く人
類の衣食住に係わる生物素材を供給する産業であり、生物生産のための生物資源の開
発と安定的供給を行なう産業である。農学は農林業の科学的基礎である。附属施設
の役割も同様で、人類の衣食住を生産するための基礎的自然科学である農林学理論の
実践の場、生物生産技術革新のための基礎実験の場、そして生物生産業としての農林業
を支える農林業人材の育成の場として農林業の基本的役割を担っている。このように、
附属施設における実習教育は人類の衣食住の生産に係わる学問を行う農学部には必
要不可欠なものであり、いわば農学部と附属農場・附属演習林は生物生産を担う両輪
である。

附属施設には農学理論の実践の場として、
農林業担い手や農林業指導者の育成や、
産業としての農林業の組織的維持・構築
に寄与する人材の育成など、実践的かつ
体験的教育・研究を行う。加えて、児童、
学生、社会人を対象とした環境教育、生
命教育や人間教育などの多様な教育を行
い、社会の要請に対して積極的な役割を
担うことが求められる。

平成11年度の「附属農場行来構
想」:最新の農業技術はもとより、
グローバルな問題である食の安全
や環境問題等にも対応した先進
的・先導的なフィールド農学を身に
付けた人材を育成することが農場
実習教育の重要な使命である
という理念が示されている。

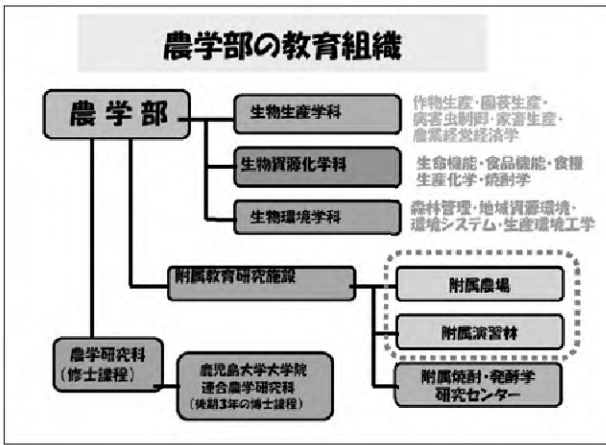
鹿児島大学農学部の建学の精神と特色

明治41(1908)年3月:鹿児島高等農林学校設置

玉利校長の式辞:

台湾の我が領有に俾し、………、台湾にも之が設立を要すべきなれども、事情異なる
地あるを以て九州の福地に設立して併せて經濟植物の栽培利用法を研究すべしとの主
意なるが如し、………、第23回總會即ち明治40年春の總會にて協賛を得て、
第二の高等農林学校として予算の成立するに至れり、其御議會に於ける当向大臣の説
明に倣するも南方経営、海外移民の意味あり、即ち当鹿児島市に之が設立をみるに至り
し蓋し其の一特徴にして、本校は将来其主旨を体して之が施設計画を為さんと期す
るものなり。

農学部は、南九州という多様な自然環境と生物資源に恵まれた地域の特性を活かし、
大学全体の理念に基づき、①農林業、食品産業等、食性農関連分野の技術者、地域指
導者など、新たな時代の社会作りに貢献する人材の養成、②フィールドでの教育を重視
し、創造性に優れ、社会のニーズに対応できる人材の養成、③分析力、総合力、企画力
及び実行力を有し、しっかりした職業観を備えた人材の養成、④国際的視野を備えた人
材の養成を行う。あわせて、フィールド等での実践的な教育を重視し、豊かな人間性と広
い視野、応用・実践能力、国際性を備えた農林業、食品産業等および食性農関連分野
の技術者・指導者などの育成する教育に努め、さらに、地域社会との連携に励み、世界
に開かれた学部であることを目的としている。



農学部附属施設における社会連携

附属農場における共同連携（鹿児島県農業振興センター）

2011年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2017年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2019年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2021年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2023年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2025年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2027年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2029年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2031年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2033年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2035年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2037年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2039年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2041年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2043年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2045年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2047年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2049年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2051年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2053年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2055年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2057年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2059年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2061年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2063年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2065年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2067年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2069年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2071年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2073年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2075年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2077年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2079年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2081年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2083年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2085年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2087年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2089年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2091年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2093年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2095年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2097年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

2099年共同・共同連携 鹿島農産物産出センター

大学改革実行プランと技術系教育の意義および役割

平成24年6月に、文部科学省から「大学改革実行プラン」が発表され、急激な少子高齢化の進行、地域コミュニティの衰退、グローバル化によるポータレス化などの日本社会が直面する課題に 대응するために、大学に対して「激しく変化する社会における大学の機能の再構築」および「大学の機能の再構築のための大学ガバナンスの充実・強化」が大学改革の二つの方向性として示された。これらの中では「グローバル化に対応した人材育成」や「地域再生の核となる大学づくり（COC: Center of Community）構想」などが提案されている。

大学改革実行プラン

文部科学省

資料1

社会の期待に応える教育改革の推進

平成24年6月4日
文部科学大臣 平野 博文

社会の期待に応える教育改革

| 現在の日本が抱える課題 | 今後目指すべき我が国の姿 |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ○急激な少子高齢化による内需及び生産人口の減少 ○ポータレス化・グローバル化の進展 ○家庭の経済状況の差による教育や雇用への格差 ○財政状況の悪化 | <ul style="list-style-type: none"> ○人材一人ひとりの創造力により高付加価値を生み出す社会 ○安心して子どもを産み育てることのできる社会 ○自ら世界の課題の解決に貢献し、国際的に尊敬される国家 ○効率優先の社会から転換し、多様性を包含する成熟社会 ○すべての国民が自らの能力を伸ばす機会を保障され、社会参加を通じて自己実現できる公正で活力ある社会 |

日本の未来を支える人材に投資し、人材イノベーションを進めることにより日本再生を実現
 > 幼児教育から高等教育まで一貫して、課題解決のために自ら考え判断・行動できる「社会を生き抜く力」や高付加価値を創造できる力を育成

教育改革の基本的視点

- ① **社会の構造的変化に整合し外部に開かれた教育への転換**
少子高齢化による内需や生産人口の減少、産業構造・就業構造の変化、グローバル化の深化に対応するため、地域コミュニティや産業界等と協働し、社会の構造的変化に整合した教育を充実。
- ② **幼・小・中・高・大の円滑な接続、教育と産業のマッチング**
大学の人口・出口の刷新（大学入試改革や産業界とのマッチングの刷新）、教育の質の向上。

※ 目標を明確化し、PDCAサイクルで進捗をフォローアップ。

1

教育改革の7つのポイント

①小中一貫教育制度・高校早期卒業制度の創設(六三三制の柔軟化)
 ①中一貫教育制度・高校早期卒業制度の創設(六三三制の柔軟化)
 ②大学入試改革
 ③大学の教育機能の再構築とミスマッチ解消
 ④英語力・グローバル力の向上

⑤国立大学のミッション再定義と重点支援
 ⑥学生の75%を占める私学の質的充実に向けた支援・メリハリある配分
 ⑦世界で戦える「リサーチ・ユニバーシティ」の増進

社会の変革のエンジンとなる大学づくり

国立大学の改革(2014年度中)

- 国立・公立・私立の大学がそれぞれ異なる役割を担い、社会の発展に貢献する体制を構築する
- 国立大学の改革(2014年度中)
- 大学の質的充実と重点支援
- 学生の75%を占める私学の質的充実
- 世界で戦える「リサーチ・ユニバーシティ」の増進

改革実行のための目標と重点支援

- 改革実行のための目標と重点支援
- 改革実行のための目標と重点支援
- 改革実行のための目標と重点支援
- 改革実行のための目標と重点支援

激しく変化する社会における大学の機能の再構築

1 大学教育の質的転換と大学入試の改革

- 大学教育の質的転換と大学入試の改革
- 大学教育の質的転換と大学入試の改革
- 大学教育の質的転換と大学入試の改革

2 グローバル化に対応した人材育成

- グローバル化に対応した人材育成
- グローバル化に対応した人材育成
- グローバル化に対応した人材育成

国立大学改革(ロードマップ)

国立大学改革の先行実施

- 国立大学改革の先行実施
- 国立大学改革の先行実施
- 国立大学改革の先行実施

国立大学改革基本方針

- 国立大学改革基本方針
- 国立大学改革基本方針
- 国立大学改革基本方針

農学部におけるミッションの再定義

特に、「(COC:Center of Community) 構想の推進」において、「地域と大学の連携強化」、「大学の生涯学習機能の強化」、「地域の雇用創出・課題解決への貢献」など、大学の附属農場や附属演習林などに大きい役割を期待している。

1) 実習の目的

2) 実習の内容

3) 実習教育の到達目標

4) 実習内容の改善

1. 教育内容の十分な把握

2. 基礎理論の上に成り立つ技術教育

3. 進捗する理論の習得

4. 地域や全国の農事情勢の把握

学部の研究の進捗、特色、特色の強みについて

学部の研究の進捗、特色、特色の強みについて

学部の研究の進捗、特色、特色の強みについて

学部の研究の進捗、特色、特色の強みについて